

入試分析 国語

問一 漢字の読み書き・俳句の鑑賞 配点20点 やや難しい

- ・配点の変化なし。文法問題が問三の論説文へ移動。短歌の鑑賞文問題が2点から4点になり難化。
- ・漢字の読みは全て選択式に変化。(イ)のd「米をとぐ。」は意外と忘れていたかもしれない。
- ・(ウ)の短歌の鑑賞文は、理解力が問われていて単純な消去法では解けなくなった。

問二 物語文 配点24点 やや難しい

- ・従来の問二古文、問三物語文、問四論説文の順番から問二物語文、問三論説文、問四古文に変化。
- ・傾向と分量は変わらないが、(イ)と(ウ)の登場人物の感情や考えを説明する問題がやや難しい。
- ・やや古い時代を舞台とする傾向はなくなったが、受験生に対するメッセージを含んだ文章が続く。文章自体は観念的な内容を多く含んでおり、論説文のように消化しながら読む必要性があった。

問三 論説文 配点30点 文章がやや難しい

- ・文法問題は、助動詞「ない」の識別で直前講座が的中。これで助動詞2回、助詞6回、副詞1回の出題。
- ・**新傾向** 四字熟語「千差万別」と類義の「十人十色」を選ぶ問題が初出で配点は2点。また、書き抜きの問題がなくなった。
- ・(ア)の接続詞を問う問題では、譲歩の「もちろん」と逆接の組み合わせが出題された。
- ・文章は「言葉」に関するもので表現がやや難しかったため、語彙の少ない生徒には苦しい。
- ・選択肢自体は従来の消去法で選びやすいが、(ケ)の本文要旨を問う問題がやや難しい。

問四 古文 配点16点 やや難しい

- ・「十訓抄」からの出題。登場人物とその身分を説明する部分が多く、丁寧に人間関係を確認しながら読む必要がある。大学入試のセンター入試や共通テストの出題と類似している。
- ・文法知識として「たまふ」「申す」「候ふ」「まかる」の敬語、「あはれ」「あやし」の単語、打消しの強調「つゆ～なかりけり」、疑問詞の「いづく」などが必要とされる本文だった。初見の古文を読み解くために文法知識が最低限必要な傾向は変わらない。
- ・問題では、(ウ)と(エ)がやや難しい。(ウ)の「あはれ」の意味が問われている。

問五 資料の読み取りと記述 配点10点 やや難しい

- ・**新傾向**(ア)は資料の数値読み取りから、内容理解に傾向が変わった。
- ・(イ)は字数が20～30字に減ったが、会話文全体を読まないと要約できないのでやや時間がかかる。

入試に向けての学習のポイント・アドバイス

- ①読解力をつける＝知らない語句の意味を調べて覚える。古文の基本単語と文法を覚える。
- ②解き方を身に付ける＝対比・言い換え・筆者の主張を追う。選択肢は本文と見比べて考える。